

テクノス通信 *Nursing*

5月
vol.72
2015
～ナーシング～

今月のテーマ 「離床センサー」の普及の背景

患者様の自立行動を妨げず、事故の危険を防ぐ介助のためのツールとして活用される「離床センサー」
今回は離床センサーの普及の背景についてご案内いたします。

●身体抑制廃止運動から広まった「離床センサー」

身体拘束は、かつて医療・介護の現場で安全を確保する目的で実施されていましたが、弊害が多い事から社会問題化し、廃止運動が高まり、現在では禁止されています。身体拘束がもたらす弊害には、身体機能の低下など身体的弊害、人間としての尊厳を侵す精神的弊害、介護保険施設等に対する社会的不信、偏見を招く社会的弊害がありました。高齢者ケアの現場では、徘徊行為や転倒・転落の防止を理由に拘束が行われてきましたが、身体拘束の禁止により身体拘束に代わる安全を確保する対策が必要となりました。そういった状

況の中で、離床センサーは拘束によらない安全対策として、医療・介護の現場に受け入れられ普及していったのです。



●身体拘束を巡る経緯

- 1998年 10月：抑制廃止福岡宣言が出される
- 1999年 3月：厚生省令において身体拘束禁止が規定される
- 2000年 4月：身体拘束禁止規定を盛り込んだ介護保険法が施行される
- 2001年 3月：厚生労働省より「身体拘束ゼロの手引き」が配布される
- 2006年 4月：介護保険施設における身体拘束廃止未実施減算が規定される

テクノスジャパンの離床センサーは「身体拘束」をしない対策のために開発されました！



離床センサーのトータル出荷台数は20万台を突破し、製品の種類も『77機種』と豊富です！



例えば「拘束具」を「離床センサー」に置き換えると…

●点滴・経管栄養チューブ抜き



チューブを抜かないよう縛られている栄養物を注入するだけの時間拘束する。



「点滴コール」でチューブ抜きを報知します。

●立ち上がり防止



車椅子にテーブルを固定してそこから出られないようにしている。



「座コール」で車いすから腰を浮かすと報知します。

●他人への迷惑行為予防



お腹をしばり胴抑制状態、起きて歩き出しベッドから転落しないよう帯のような道具で固定する。



「ベッドセンサー」でベッド上の起き上がりを報知します。

●自分で降りられないように



4点柵でベッド周りを柵で囲み降りられないようにする。



「タッチセンサー」でベッドからの離床を報知します。



「離床センサー」は対象者の行動を抑制しないことから、高齢者ケアにおける「QOLの向上」という目標とも合致し、現在では多くの医療・介護の現場で採用されています。